青山光二

顔斬り

顔斬り

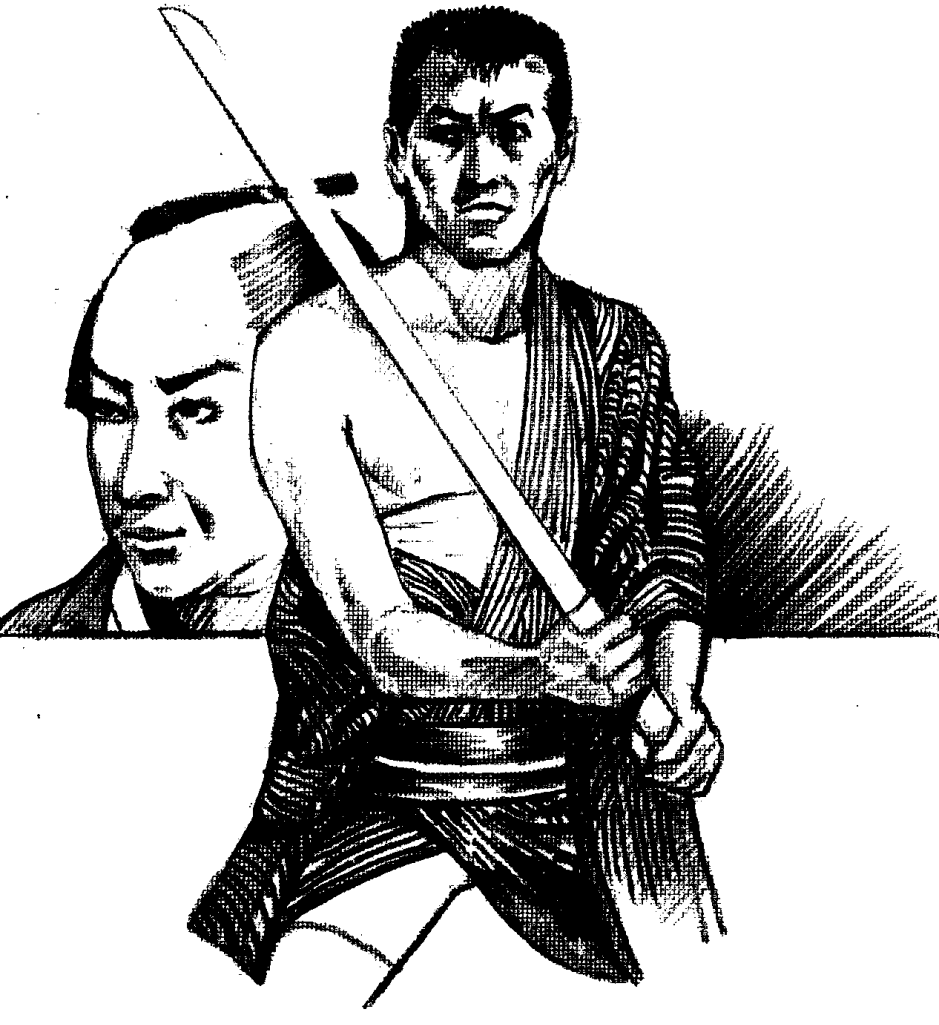
著　者　青山光二
発行者　深見兵吉
発行所　光風社出版株式会社
東京都文京区関口一―三二―四　郵便番号一一二
電話番号〇三―二〇四―二四四一　振替東京八―一二九一三
印刷所　サンワード企画
製本所　越後堂製本

落丁、乱丁はおとりかえします。
定価はカバーに明記してあります。
© 1986 KOJI AOYAMA　Printed in Japan

ISBN4-87519-534-6

青山光二

顔斬り



光風社出版

●目　次

顔斬り　5
モガスケ　85
一匹の獣　111
敗北の顔　141
流れ者が撃たれる　179
オートバイ　205
猪（いのしし）　233

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

装幀　中村竹次郎

顔斬り

北島廉吉は、二階座敷に附属した後架へ立ったついでに、ふっと帳場を覗いてみる気になり、ギシギシ鳴る階段を降りて行った。旧幕時代からの暖簾だという、この宮川町のお茶屋『三喜』は、その建物じたいも、あるいは百年以上も経っているのかと思われるほど、並やたいていの古びようではなかった。が、それだけに付け焼刃ではない貫禄も、奥深い家作りぜんたいにどことなくそなわっていて、それがまた売りものであった。

洛西帷子ノ辻の材木商主人北島廉吉が、客をもてなす際、しばしば『三喜』へ足を向けるのは、女将と古馴染だからでもあったが、一つにはまた、二十年来そこに住込み女中として働いている菊乃のことが何となく気がかりで、時たま顔を見たくなるからであった。

「おひや一ぱい、ご馳走してんか」

そんなことをいって、帳場のテレビの前に胡坐をかいた北島に、女将は手を振って、立ちながらいった。

「いうてくれはったら、持って行きますがな。お客さんほったらかしといて、あんさん、よろしおすのんか？」

「かまへんかまへん、気らくな連中やよって、芸子はんにまかしといたら、ええ調子に遊びよる」そして大男の北島は、睥睨するようにあたりを見まわして、付け加えた。「菊乃はん、元気にやってるか？」

部屋の隅の冷蔵庫の前で、水差しの水をグラスに注ぎながら、女将が応えた。

「元気どっせ。十年一日ちゅうのんは、菊乃はんのこっちゃ。働きもんのあの人がいててくれるお蔭で、うちの商売立ち行ってるようなもんどすわ。いや、ほんま！　ちょっと使いに行てもろてるんどすけど、もう帰りまっしゃろ」

「若う見えるけど、あれでもう六十三や。あんまり、こき使うなよ、ママ」

「へえへえ、大丈夫どす。そういえば北島はん、おうちも還暦すみはったんどしたなあ」

「わいは六十四やがな。しかし若いやろ！」

「自分でいうてたら世話おへんわ」

アイス・ウォーターを載せた盆を北島の前に置いてから、女将はテレビのダイアルを廻してチャンネルをかえた。ナイト・ショーの番組でかつての流行歌手小畑実が勘太郎月夜唄をうたっていた。伊那は七谷　糸ひく煙　棄てて別れた故郷の月に……、すると画面は、ゲスト出演のスター瀬川賀寿夫の顔の大写しに変り、職業的な微笑は絶やさぬながら、眼を細め、内心の感慨を蔽いきれぬらしい面持ちを、カメラは機敏にとらえていた。勘太郎月夜唄は、瀬川賀寿夫が戦争中に主演して大当りをとった同じ題名の時代劇映画の主題歌なのである。

「あんさんも若うおすけど――」と女将がいった。「瀬川賀寿夫も、いつまでたっても若うて艶の

ある、ふしぎな役者はんどすなあ」
「そこが永遠の二枚目といわれる所以やがな。このかすれ声と、とろんとした眼つきが何ともいえん、ちゅうくちと違うか、ママ？」
「それほどでもおへんけど、この人にくらべたら、近ごろの活動役者は、わてら、もうひとつ、ぴったりと来まへんわ」
小畑実の歌が、やがて終ると、テレビの画面は、小畑と瀬川賀寿夫の握手のシーンを映し出した。そして司会者の質問にこたえて、瀬川がにこやかに、控えめな態度で想い出ばなしを語っている。タートル・ネックの白いシャツのよく似合う、その顔の大写しを眺めて、北島は、
（アップになると、傷は、やっぱり相当、目立つなあ……）
と呟いた。左の頬から唇尻へかけて一直線に傷痕が這っているのが、よく見ればわかるのだ。
（瀬川賀寿夫の顔の傷は、松田五郎の勲章やった。五郎が死んで、勲章だけが、ここにこうして生きてよる……）
当時、森京二郎という芸名で二枚目スターの第一人者だった瀬川賀寿夫に斬りつけて、顔に傷を負わせたのが松田五郎――、ということに、北島のあたまの中では、なっている。じっさいに斬りつけたのは五郎の配下の朴玄生だが、決意し計画して、それを朴に命令したのは五郎だった。裁判のあとの判決も、下手人の朴玄生より、共犯の五郎の方が刑が重かった。
（あのとき、わいが制めていたら……）
と北島は、これまで何度も考えたことを、またしてもあたまにうかべるのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

（いや五郎は、制められてやめるような男やない。それに、五郎がやらなかったにしても、誰ぞ別のやつが、かならずやりよったやろ）

瀬川賀寿夫の顔の傷が、俳優業にさしつかえぬ程度に癒ったのがせめてものことだというのが、大きい商いをする材木商の大旦那に納まっている北島廉吉の、今となっての鷹揚な心境だった。事件当時の北島は、松田五郎の兄貴格、おなじ西京組（にしきょうぐみ）の代紋を背負って、京の町をのしあるく法の外の住人だった。それから三十余年が経っている。

からになったグラスを北島が盆にもどしたとき、使いから帰った菊乃が帳場に顔を出した。ご苦労はん、と迎える女将に用向きを伝えようとして北島に気づき、両手をついて、

「あ、旦那はん、おいでやす」

「菊乃はん、達者で何よりやな」

「へえ、おおきに」

極端に口数の少い女である。地味につくっているが、細おもての整った眼鼻立ちは、どう見ても五十歳そこそこにしか見えない。それでいて鼻筋のあたり、どことなく寂しい翳のある顔立ちだった。

（この女は、あの事件のことをどう思ってるんやろか。知らんはずないのやが……）

ひそひそ声で女将と話している菊乃の、すんなりした軀つきに視線を這わせて、北島は呟（つぶや）くのだった。テレビの画面には、股旅姿の瀬川賀寿夫のスチル写真がつぎつぎと映し出され、それに司会者と瀬川の会話が、かぶっていた。菊乃が松田五郎と一緒にくらすようになったのは、五郎

が刑をおえて北海道の苗穂刑務所を出てから間もなくのことだ。やがて、降り坂を堕ちる一方の五郎の人生を、彼女は献身的に支えた。そして五郎が死に、ひとりぼっちになった菊乃を『三喜』の女中に世話したのは、やっと堅気の商人に転身していた北島である。その頃『三喜』はすでに、事件当時、妙齢の養女だった現在の女将の代になっていた。

「北島の旦那はん、ほな、ごゆっくりどうぞ」

菊乃は、女将との用談がすむと、北島に声をかけておいて、テレビなど見向きもせず、忙しそうに帳場を出て行った。すると北島も、よいしょ、と掛け声をかけて腰をあげた。女将が、

「ご苦労はんどすな」

「ほんまにいな。客の接待も商売のうちとはいいながら、や」

そろそろ火が恋しくなる季節、鴨川べりに細長く伸びた花街は、暗い夜の底で、しっとりとはなやいでい

北島廉吉がはじめて松田五郎に会ったのは昭和十年正月四日、粉雪の降りしきる宵のことであった。

『三喜』の脇の狭い路地を疏水の通りへ出ようとして、傾げた番傘を低くし、急ぎ足になった北島は、向うから来た四、五人の男に行く手を阻まれた。

「おい、北島やろ」
聞きおぼえのある声がいった。傘をあげて、仄明りに見ると中村の勉コという不良で、黒い木綿羽織の長い白紐を首へかけ、縞の袴に駒下駄をはいている。一様に雪だらけになったほかの連中も、同じ壮士気取りの服装であり、神州報国隊の木端どもに違いなかった。北島は、せせらわらう口調で、
「何ぞ用かい！」
「三喜に寺尾の新ちゃん、いよるやろ。呼んで来てくれ」
寺尾新太郎が『三喜』の二階で酔いつぶれているのは事実だった。彼は電鉄会社社長の一人息子だが、どういうものかヤクザモンが好きで、いつも誰か、これぞという若い極道の面倒を見、せっせと注ぎこんでいる。目下のところは、そのお相手が北島廉吉というわけだった。神州報国隊のチンピラどもが新太郎に用といえば、相場はきまっていた。金だ。そう思った北島は、
「新ちゃんに用があるんなら、わいが代りに聞いたるわ。そっちィ出えや！」
中村の勉コの胸を押すようにして、足を前へ進めた。すれ違うのがやっとの路地である上に、五尺八寸ゆたかの仁王のような体格の北島に押し戻されて、よろけながら、やむなく勉コは踵を返した。仲間の三、四人も踵を返して、肩を怒らしながら暗い路地を出て行った。
疏水にそった二メートル幅の道路を出ると、北からの風が粉雪を押して、殴りつけるように吹きつけて来、北島は番傘をたたんだが、それは、前後から七、八人もの男に取り囲まれるかたちになったからでもあった。路地の入口で待ち構えていた中の一人が、

「新ちゃんと違うやないか」
と呟き、同時に中村の勉コが、凄んで、
「おい、新ちゃん連れて来い、いうてんねやぞ」
「そやから、わいが代りに相手になったる、いうてるやないかい」
黒っぽい結城の上下を着て、いっけん若旦那ふうの北島は、うっすらと雪の積った道路に根が生えたように立ち、不敵にいい放った。
「よし」と、明らかに仕込みと思える桜材の杖を握った、長髪を額に垂らした男がいった。「こいつから先にかたずけたろ。ついて来い」
そして、雪明りの中を、南座とは反対の方角へ歩きだした。北島がつづき、縞の袴に黒い羽織の連中が取り囲んで、宮川町裏の疏水べりを南へ下った。
(わいらの巣を、こいつら、嗅ぎつけてけつかる)
北島は呟いた。『三喜』へ寺尾新太郎が入りびたるのは、父が社用の接待に利用する家と知って、勘定を父につけるためだったが、つるんで遊ぶ北島も、まんざら、この家と縁がないわけではない。北島の父と『三喜』の主人は古い付合いで、何か厄介なことがあれば後者は、前者に声をかけるといった間柄であったから、塩を撒かれるという後ろめたさは少いのだ。しかし北島は、格式ばかり高くて、べつだんおもしろいこともないお茶屋は気ぶっせいで、めったに『三喜』へは足を向けなかった。当時の宮川町は芸妓と娼妓の二本立てだったが、『三喜』へは娼妓は入らないのである。四条大橋界隈を根城に北島がくすぼりだしてから四、五年になるが、娼妓の町とし

ての宮川町にしか、どの意味でも彼は用がなかった。
「どこまで行くんじゃい」
北島は怒鳴った。背後から吹きつけて来る風で、降りしきる粉雪が、降って来るはたから、向うへ向うへと吸いこまれて行く。そう遅い時間でもないのに、人通りは、ぱったりと絶えていた。
「じきそこじゃ。まあ、ついて来いや」
仕込杖の男が応えた通り、歩いたのはほんのわずかで、彼はやがて、疏水に架けた小橋を先に立って渡って行った。疏水に並行して京阪電車の線路が走っており、それを越えると松原橋――、下を鴨川が流れているのである。仕込みではなさそうなステッキを握った男が、北島を追い立てるようにして線路を渡る後から、ぞろぞろと連中がついて来る。先頭の男の歩いて行く方角から見て、川原へ降りる気やな、と直感した北島は、とっさに、
「おい、ここで話をきいたるわ」
足をとめて身構えた。広い川原で多勢を相手にしては勝味がないのだ。なにィ、と振向いた男が仕込杖へ手をかけると見るより早く、北島は、手にした番傘を力いっぱい横に払った。ビンタを思いきり打たれて相手の眼が数瞬くらんでいるあいだに、北島の番傘は、めったやたらと、あとの連中の顔や頭をなぎ払っていた。
機先を制しておいて彼は、一散に逃げ出すべく松原橋のかかりへ駈けこんだが、テキもたちまち立ち直って、
「逃がすな」

「たたんでまえ！」

と声を掛け合いながら迫って来る。しかも、いちばん先頭に立っているのは、驚いたことに、仕込杖を抜きはなった長髪の男であった。遠い明りに閃めく刀身の動きでそれと知った北島は、

（背中を截ち割られてはかなわん）

と、いきなり踵を返して、番傘を振りまわした。が、どうしたことか、かんじんの芯棒の竹が折れているのに気づくと彼は、ちえっと舌打ちして、番傘を投げすてた。そこをすかさず長髪の男は、刃を振りかぶって迫って来る。橋の欄干近くにいた北島が夢中で敵の手許へ跳びこんだとき、無反りの刀身は、吹きまくる粉雪を截って振りおろされていた。

欄干の上で、北島の手首が痺れた。その上に、刀を握った男の手首が載っていた。北島は手首で相手の手首をうけとめ、それがたまたま欄干の上だったのだ。勢いあまった長髪の男は、平衡をうしなって、のめりこんで来た。喧嘩馴れた北島は、そこを逃さず、膝がしらで金的を蹴上げた。執念深く、仕込の柄を握りしめたまま、欄干ぎわに崩れおちて呻いている男を離れながら、

「勉コ！」と北島はいった。「お前らみたいな木端が相手では、話がわからん。原キンをだせ！」

「おう、ここにおるわい」

いつの間に現われたのか、当の原キンこと原田金次郎が、黒羽織の連中を従えるかたちで、眼の前二メートルの距離に立っていた。この男が神州報国隊の隊長である。もう一人、小柄な男が、原キンの脇に立っている。

（副隊長やな？）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c